故也御料と云な御料人を略したる詞も今時人のむすめの事を御料とで、後も御料人とも云人有り、

【indr鼠抄挙内方の敬称は貴賢に亘る例

後世は牛の妻を内方といふは下さりにのみ限るる事とみゆれど古くは貴人をを呼か呼し事

と聞えるは誠之集上名に延長四年きよりの民邸六十の賀つすけの中納言内方から

朝臣来云修理大夫内方自夜半有懐気入滅悲歎無極云々諸筆任に中納言宮城

将内方乳之後死去は口中納言朝成第三女也また正室四年正月十九日記云早旦左京亮国平

長元大歳大輔茶屋は毎日に及ぶべきを兼て期せずに依て飲膳の用意なり将軍の茶屋へ

せられ便膳あらは急ぎ上よと仰しかは大歳大に悦び則上奉る時中見せ大なるにありつる飄飄

を御膳に物し給へば足まかはを被下候やうにと乞つ、茶屋のか、甘はかりなる二三月

呼ば

太閤記十六醜醜の花見

爾の切に牛の刀を用るにいたれり、按るに字書に錦は有りとあれば賤しき婦ををして貴婦とお

としの云ことはなり錦女や御妻なるべし東都にて傾城奉公人の肝煎する者を女宮と云を街

破

人部

親戚

親戚

一係

五

二

三

人

南